

もくじ

- 01.知財業界にも必要な「やさしい日本語表現」
- 02.世界へ「物・事考え」を誤解なく伝えるための日本語
- 03.日本でも必要な「平明日本語」運動
- 04.日本語が国連の公用語に採用されたら、どうする
- 05.井上ひさしの留学生支援を目的とした「日本語教室」
- 06.「美しい日本語」と「曖昧日本語」:ノーベル文学賞川端康成と大江健三郎
- 07.文学界でも関心が寄せられている「やさしい日本語」:
・村上春樹・芝田元幸の書籍:「本当の翻訳の話をしよう(スイッチパブリック社)」
- 08.難解あるいは、難解が尊し(たつし):夏目漱石の我輩は猫である
- 09.グローバル化の足かせとなる「曖昧日本語」
- 10.翻訳ソフトが使える、やさしい日本語-①:「日⇄日」翻訳
- 11.翻訳ソフトが使える、やさしい日本語-②
- 12.翻訳ソフトが使える、やさしい日本語-③
- 13.日本語の難しさを、改めて知りました①:“僕はウナギだ、俺カツ丼”
- 14.日本語の難しさを、改めて知りました②:亡くなったのは誰だ!
- 15.翻訳ソフトの落とし穴:笑えない誤訳
- 16.論文の書き方(澤田昭夫:講談社学術文庫)
- 17.文書作成に必要な「心・知・勇」
- 18.開かれた日本語、「オープン・ジャパニーズ」

(2019/08/15)

1. 知財業界にも必要な「やさしい日本語表現」

朝日新聞夕刊:現場へ(7/1-5)」

で取り上げていた「やさしい日本語」

朝日新聞の夕刊「現場へ(7/1-5)」に「やさしい日本語(刀祢館正明)」が掲載されていた。日本に住む外国人が増えれば、外国人にも分かりやすいように工夫をし、簡単にする日本語のことである。いろんな分野で「やさしい日本語」が構築されている様子を記事にしている。例えば「災害避難の呼びかけ」や「医療、介護の世界」など多岐に及ぶ。知財業界も取り残されずに「やさしい日本語運動」を推進すべき時期にあると思う。余談だが中でも厄介なのが「お役所言葉」で、苦笑させられた。「税金を納める」を「税金を払う」には抵抗があるらしい。

「税金を納める」は、どのように英訳されるのか、それが知りたい。そこで英語の達人に教えを被った。彼の英翻訳は、Tax Payer(タックスペイヤー)である。その意味は「税金を払う人」。向きを変えれば「議員や行政官が最も丁寧に接しなければならない人」となる。「税金を納める」と「税金を払う」の日本語の意味は微妙な違いがあるようだ。例えば「納められた税金」の使い道は、お上が勝手に決められる。「払った税金」の使い道は、払った人の意見を取り入れてくれそうである。ひょっとして、お役所が抵抗する理由は、こんなところにあるのかな?このように日本語の解釈は奥が深く、実に悩ましい。しかし英語訳すると、どのような意味になるのか「アレコレ」と考えると興味が尽きない。

2. 世界へ「物・事・考え」を伝える「日本語」

2020年7月、東京オリンピック・パラリンピックが開催される。

大会組織委員会は、大会期間中に内外国から会場へ訪れる選手、スタッフ、観客を含め 1000 万人超を見込んでいる。大会期間中に地震等による建造物の被害、豪雨による水害といった自然災害が起こる可能性がある。それだけではない。高温、高湿の猛暑での開催だけに“熱中症にならないよう、食中毒を起こさぬよう”と言った「注意・呼びかけ」も必要である。

政府や自治体は、災害が起きた時、外国人へどのような情報を、どうやって伝えるべきか、言葉や習慣の壁を乗り越えて来場者の安全と命を守ることは極めて重い課題である。

「いま何が起きているのか」、「どう対処すべきなのか」、つまり避難方法(逃げる方法)や非難場所(逃げる場所)への誘導の方法を入念に準備しておかねばならない。そのためには、混乱、誤解が生じない分かりやすい情報(伝達)を発信することが重要となる。それが「やさしい日本語」である。

因みに「避難」、「消火」の漢語に”する”を付けると動詞になる。これは日本語の特長(凄い)で、外国人が理解することは困難である。“避難するは、逃げる、消火するは、火を消す”であれば分かりやすい。つまり日本語の動詞を見直すことで解決策が見えてくるのではなからうか。

3. 日本でも必要な「平明日本語」運動

英・米で続けられている「平明英語」運動

もう四半世紀以上も前から、イギリスとアメリカで続けられている「平明英語」(Plain English)運動が、分かりにくい文書の最たるものとして槍玉に挙げてきているのが、法律家(lawyer)が作成している裁判の判決文であり、また官僚が作成している官公庁の各種フォーム文書である。

この事を知ったとき、日本社会でも英米社会でも、法律家や官僚というのはどこでも同じなのだと言いを押さえることができなかった。違うところは、英米社会では、どのような文書であれ平明に作成しよう、という運動が行われているのに、日本では無頓着に難解文書が放置されたままであるところだ。

もちろん日本のお役所においても、わかりやすく説明しようという努力がなされてきているのは承知しているが、我々庶民が読んで、役所が求める提出書類が「すいすい」と書き込める状態には程遠い。税金をもれなく集めるという目的があるにしては、行届かないことおびただしい。

なぜなのだろうか。わかりやすく記述しようという姿勢はあるのだが、どのように記述すれば良いのかが分からないのだろう。誰にとってもわかりやすく書くということは、「お客様」の立場に立ってサービスするという親切心が身につけていないと実現はできない。(2006/06/20 篠原泰正)

4. 日本語が国連の公用語に採用されるには

日本語が国連(United Nations)の公用語(official language)になったら、あなたはどうする？

政府をはじめ誰もが、世界の人々に理解してもらうための「日本語」ということを考えたことがないから、まさに晴天の霹靂(ヘキレキ)になることだろう。もちろん、万に一つも、日本語が世界の検舞台に立つことは現在の「日本言語文明」が続いている間はないだろうけれど、検舞台が準備されているつもりで、我々の日本語を見直すことは、大いに意義あることである。いな、意義どころか、これからの世界で生きていくためには、必須の課題であると思う。

世界のどの国の人であれ、日本語をわかりやすく学習することができ、その学習によって、日本政府の発表、社会保険の新しい仕組み、確定申告のやり方、生命保険の契約、アパートの賃貸契約書、裁判の判決文、特許公報等が読めるようになることが望ましい。病院に行ったら医者 of 診断を理解でき、市役所に行ったら住民登録のやり方が理解でき、日本で看護師の資格を取ろうとすれば、国家試験の問題が理解できるようになっていなければならない。

このことを実現するためには、もちろん、学習者個人の能力に依存するのではなく、日本語を勉強した誰もが理解できる「やさしい日本語」を我々が提供しなければならない。(2008/04/16 篠原泰正)

5. 留学生支援を目的とした「日本語教室」

井上ひさしさん(故人)が、日本語教室(新潮新書)で、木下是雄先生(当時、学習院大学理学部教授)の『理科系の作文技術』(中央公書)について、素晴らしい御本だと述べている。

『木下先生の教え子たちが、一生懸命に自分たちの研究を英語で書こうとしても、ぜんぜん書けない。書いてもめちゃくちゃなのです。木下先生は、さんざんそれを観察して考えました。そして結局、教え子たちは日本語を知らない、日本語を知らないから英語も書けないのだ、ということに気づいた。そこでハッキリしたことは、英語でなければ世界の人たちに読んでもらえないという事実です。英語を母語としていない学者たちも今では英語が必要です』と。(原文を引用)

井上ひさしさんは、『日本語とはどのような言語なのか、外国語を勉強することで見えてくる。外国語が上手になるためには、日本語をしっかり身につける。それは、たかさんの言葉を覚えるということだけでなく、日本語の構造といった大事なところを自然に、しっかりと身につける事が大事です』と述べている。そして、日本語の成り立ちを分かりやすく、興味深く、講義している。『私たちはいま、昔からのやまと言葉である和語と、中国から借り入れた漢字を使った漢語と、欧米から借りた外来語を一緒にして、微妙に使い分けながら生活しています。ですから外国人は、理解するのに苦労していると思います。日本人は「世界に開かれた日本語」を持つことが必要です。伝えたいことは、他人に理解してもらわなければいけません。このことはどんな言語でも共通していることです。』と。

6. 「美しい日本語」と「曖昧日本語」

過去にノーベル文学書を受けた川端康成氏と大江健三郎氏の受賞スピーチについて、池上彰氏が興味ある解説をしていた。『川端康成は「美しい日本の中の自分」、大江健三郎は「曖昧日本の中の自分」という内容であった。川端康成は、美しい日本から生まれる叙情的な美しい言語の利点(日本文化を感じられる日本の美)について、大江健三郎は、曖昧日本から生まれる曖昧言語の弊害(世界から取り残される)についてスピーチした』と。

井上ひさしさんも、この書籍の中で大江健三郎さんのことを述べている。『大江健三郎さんがノーベル賞を受賞したときの講演は、「あいまいな日本の私」という題でした。あいまいは「日本」にかかるのか、「私」にかかるのか分かりません。そこが大江さんの狙いだったわけです』と。

『大江健三郎・柄谷行人全対話:世界と日本と日本人(講談社)』

1.世界言語の可能性について:「ある言語を持った人間が、それを他国の言語、例えば英語に翻訳して、いい伝達のされ方をするような表現が日本語に出来ていれば良い」「日本語で書きながら世界言語でもありうるような表現を日本人がしていく。とくにこれからの若い人たちがして行くことを心から望んでいる」

2.特殊な日本語の普遍的な表現について:「英語に翻訳されてしまうと自分の考え方や思考の展開の仕方、書き方が本当に壊滅的打撃を受けます。しかし特殊な日本人、特殊な言語である日本語を使って普遍的なものを書きたいと言う気持ちが強い」

7. 文学界でも進められる「やさしい日本語」

村上春樹・柴田元幸の書籍:「本当の翻訳の話をしてしよう」

村上春樹・柴田元幸:「本当の翻訳の話をしてしよう」(出版:スイッチパブリック)が興味深い。村上春樹さんが高校生の時代から英語文学の翻訳をしていたことは知らなかった。彼の作品(小説)は世界の人達から広く読まれていることは御承知のとおりである。英語文学の翻訳を数多く手がけてきたことが自身の才能と結びつき、村上春樹の世界を作り上げていると思う。その世界の底流に流れているのは「言語の扱い方」である。つまり、誤解がなく正確に翻訳できることを強く意識した”普遍的な日本語表現”を考え、考え抜いていることが分かる。そのような作者の「創作作法」が読者へのあるいは、翻訳者への礼儀(マナー)であることが、この書籍から改めて教えられた。

トンネルを抜けたのは誰だ？

叙情的日本語文章も英文に翻訳されると事実と状況の説明文

国境の長いトンネルを
抜けると
雪国 **であった。**

川端康成 「雪国」より

The train
came out
of the long tunnel
into the snow country.

E・サイデンステッカー訳

8. 難解あるいは、難解が尊し（たっとし）

夏目漱石の代表作「我輩は猫である」

2016年は、夏目漱石が亡くなって100年ということで、漱石ブームである。漱石の代表作「我輩は猫である」に、訳の分からない手紙を受け取って、猫の主人である苦沙弥(くしゃみ)先生がやたら感心する場面がある。

”なかなか意味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違いない。天晴れな見識だ”と大変賞賛した。この一言でも主人の愚なところはよく分るが、翻って考えて見ると聊か(いささか)尤も(もつとも)な点もある。主人は何に寄らず わからぬものをありがたがる癖を有している。これはあながち主人に限った事でもなからう。分らぬ所には 何だか気高い心持が起こるものだ。それだから俗人は 分らぬ事を分かったように吹聴するにもかかわらず、学者は 分かった事を分らぬように講釈する。

この名作は百年前に書かれたものだが、これを見ると「分らない文章をありがたがる」性癖は、世間一般において、いまだに受け継がれているようだ。日本では難解文章はいろんところで見受けられる。

【曖昧は日本人の美意識?】:「うやむや」は、漢字では「有耶無耶」と書くき、有るか無いかをはっきりしないことの意味で、曖昧なこと、いい加減なことを指す。仏教では、目に見える物、見えないう物の有無について思索することが大きな課題となっている。つまり「有」と「無」どちらに固執することも善しとせず「有耶無耶」したところに真の安らぎを求めるものと説いている。(仏教語)

9. 国際化の足かせとなる、「曖昧日本語」

◇法令の翻訳、一割どまり(日本経済新聞 2018/10/22)

「日本の法令の英訳開始は、09年4月に遡る。司法制度改革の一環で、政府が、「ビジネスのグローバル化に対応するには法令の適切な翻訳が不可欠」との方針を打ち出し、法務省の所轄事業として始まった。ただ壁となるのが翻訳人材の確保だ。英語と法律に精通する人は限られている。法令の翻訳は、専門的で難易度が高い」

◇外国人児童の高校の中退率9%超え(朝日新聞 2018/09/30)

「外国人児童(日本籍・外国籍)が高校に進んでも日本語の壁、授業の言葉は難しい。特に物理や生物は日本語が難しい。日本語は日常会話なら大丈夫。しかし書く、読み取りとなれば、これほど難しい言語は無い」

◇例えば、「私は悪い、私が悪い」の区別が難しい

当社へ入社(1992年)して間もなかった「中国人社員」が言ったことが印象に残っている。彼女が言うには、「私は悪い、私が悪い、の区別が出来ず困っている」とのことであった。日本人は、この区別ができるが外国人にはとても難しい。「私は、悪い」は、属性を表し、その人は悪い人である。「私が、悪い」は、ある出来事(事件)に関して、たまたま「私が、悪い」のであって時制の限定がある。そこで、彼女は、「が」と「は」をすっ飛ばして「私、悪くない！」と言うようにしたそうだ。否定文であれば「私は悪くない」これは通じる。しかし「私が悪くない」となれば日本人でも通じない。外国人にとって日本語の何処が理解しにくいのか？こんなことをアレコレと考えて日本語を見直すと面白い。要するに日本人は外国人に対して分かりやすく説明する努力が足りない。

10. 翻訳ソフトが使える、やさしい日本語①

日本語から日本語への翻訳:「日⇄日」翻訳

たまに会う中学校時代の同窓会は楽しい。終わった人たち？の集まりは、現況報告と旅行話から始まる。行き着くところ健康談義で場が盛り上がる。耳が遠くなったので都合の悪い話は聞こえない、目が悪くなったので先(行く末)が見えない、物忘れが酷くなったので”呆けるが勝ち！”といった類の話は、笑い飛ばして楽しめる。

私の旅行話は、長春・瀋陽・大連への旅行(2017/6月)である。「妻は、この旅行に備えて「日⇄中」翻訳ソフトをiPhoneに入れたが、いつもの調子で「コテコテ日本語」を入力して変換。しかし意味不明で伝わらない。”この翻訳ソフトは、お馬鹿さんで使えない”と、不機嫌。そこで私が、どんな日本語を入力したのかを確認。文章を作り直して再入力。相手は”解ります”と嬉しそう。”やはり翻訳ソフトは賢いわね”と妻の機嫌が、コロッと良くなった。といった、たわいのない話である。

S君は、私の話を聞いて、いちいち頷いてくれる。彼の娘さんは、アメリカ人と結婚しており、アメリカで暮らしている。娘さん家族との近況報告はメールを使って、英語でやり取りしている。今ではコミュニケーションが上手く取れるようになった、と嬉しそう。彼は、英語が苦手であることを吹聴していた筈だが、それが、なぜ？

11. 翻訳ソフトが使える、やさしい日本語②

彼の説明によると、まず自分の日本語を①の翻訳ソフト(*)で英語へ翻訳し、その英文をコピーして、②の翻訳ソフト(*)にかけて日本語へ翻訳する。そうすると変な日本語がでてくるので、日本語を修正し、再度①の翻訳ソフトを使う。このように2つの google 翻訳ソフトを行ったり来たりしてやっている。このやり方で翻訳した英文を英語の達人に見せたことがある。家族へ出す英文にしては「固すぎる」と言われた。しかし一番大事なことは、相手に伝わることであるから、と合格を貰ったようだ。そして彼は、私に言う。技術論文や特許明細書であれば、翻訳ソフトの支援が受けられるのではないかと。

そのとおり、発明技術の説明は、事実を矛盾なく明確に伝えることが目的である。論理力は必要だが、文才は必要ない。要するに日本文化に根ざした叙情的で美しい、あるいは阿吽の呼吸を期待した以心伝心の「文化日本語」でなく、世界へ「物、事、考え」を伝える為の平明日本語、即ち「文明日本語」で書けば済むことである。彼が指摘したとおり、特許文書の翻訳は、翻訳ソフトの支援が受け易い「文明言語」の世界である。

(*)①の翻訳ソフトは、 아이폰に常駐している翻訳ソフト:(ネット環境が無くても使える。過去に翻訳した履歴が残る、自分だけの「辞書(AI)」を構築できる)。

(*)②の翻訳ソフトは、ネット上で翻訳する google 翻訳ソフト:(ネット環境が無いと使えない)

12. 翻訳ソフトが使える、やさしい日本語③

彼が言うには、「当初は面倒だったが、英語でやり取りができる喜びは大きい。英語が苦手であっても、やさしい日本語で書けば、翻訳ソフトのお陰でコミュニケーションが成立することがわかった。良き時代にリタイア出来た自分は幸運である」と。

現地代理人とのコミュニケーションに、このような方法を採用している知財担当者も多いと聞いている。「アレコレ」とやり取りする中で、翻訳ができる「普遍的な日本語表現」を強く意識するようになり、言語障壁の敷居も格段と低くなっているようだ。こちらから日本語を渡せば、現地代理人は翻訳ソフトを使って対応してくれるようになった、という話も聞いている。

叙情の日本語と状況記述の日本語

古池や 蛙飛び込む 水の音 芭蕉

私は	古池に蛙が	
	飛び込むのを	見た。
私は	古池に蛙が	
	飛び込んだ音を	聞いた。
	私が古池のほとりにいた時	
	蛙がその池に	
	飛び込んだときの	
音が		聞こえた。

13. 日本語の難しさを、改めて知りました①

“僕は、ウナギだ、俺、カツ丼“

仲間数人と、ガヤガヤと会社の近くの居酒屋に昼飯を取りに行く。おネエさんに次々と注文の声が入る。“僕は、ウナギだ”、“俺、カツ丼”。仲間の中に、日常会話には不自由しない程度に日本語ができる欧米人が交じっていたら、ビックリするだろう。「山田さんは人類だと思っていたのに、ウナギなんですか！」と。そりゃそうだ。「僕はウナギだ」を英語に直訳すると、「I am a eel.」となる。

「僕はウナギだ」が、「僕は(サブジェクト)ウナギを(オブジェクト)食べます(食べたい、選択します)(動詞)」というセンテンスが変形したものであることは、日本語を母語とする人であれば誰もがわかっていることである。その証拠に、何分か後には、間違いなく、山田さんの前に「うな丼」が運ばれてきた。おネエさんは山田さんが「ウナギ」であるとはみなさなかつたのである。

もっとも、山田さんが日和見主義で、いつも意見がはっきりしない、ウナギのように捕まえどころのない人であれば、「山田はウナギだ」と上司が評することにもなる。この場合には、「山田(サブジェクト)はウナギ(のようにヌルヌルととらえどころのない)人である」という意味であるから、山田さんの属性を定義したセンテンスとなる。上司の山田評を英語に直せば、次のようになるだろう。

「Mr. Ymada is a difficult person who does not show in open what he wants. He looks like a eel.」 (2005/09/03 篠原泰正)

14. 日本語の難しさを、改めて知りました②

亡くなったのは誰だ！

妻の友人が、おもしろい発明をしたので聞いて欲しい、ということで茶飲み会をした。おばちゃん同士の話は、あらぬところへ「アッチ、コッチ」と唐突的に飛ぶ。しかしチャンと伝わるからすごい。

「亡くなった主人の母が・・・」が耳に入った。私は主人が亡くなったのかと取った。お悔やみの言葉を搜しているうちに、亡くなったのはどうも主人の母親であることが判明した。妻は日頃からお付き合いをしているので主人の母親が亡くなったことを知っているわけだ。私はその様な背景を持ち合わせていない。

同じ仲間(村社会)であれば理解できるのであろうが、村人でない私には背景が分からない。私が翻訳したら「亡くなったのは主人です」と訳す。妻は「亡くなったのは主人の母親です」と、正しく訳せる。このように日本語は曖昧で係り受けが不明確である。聞く人、読む人の判断によって意味が異なることが生じる。係り受けの分かり難い文章が、あらゆる文書に使われているとすれば、翻訳が難しく誤訳をおこすのは当然である。(発明くん/2016/1/12)



15. 翻訳ソフトの落とし穴：笑えない誤訳

誤訳の案内板、訪日客が困惑

外国人向けの観光案内で、誤訳が「あちら、こちら」で見つまっている。有名なのが高尾山に建ててあった看板で、とある新聞(すいません忘れてました)で、下記の翻訳が紹介されていた。この翻訳は、翻訳ソフトで翻訳された中国語訳を専門家のチェックを受けていなかったようだ。

日本語:「思い出とゴミは持ち帰ろう」。この中国語翻訳を日本語へ翻訳すると:「ゴミを捨てないなら、帰りなさい」となるようだ。笑い事では済まされない。観光立国日本を目指すのイメージダウンにも繋がる。



16. 論文の書き方「澤田昭夫（講談社）」

和文の原文が、まともに書かれていない

私の手元に、「論文の書き方」(澤田昭夫著、講談社学術文庫)という本がある。その「はしがき」に澤田教授が次のように書いている:「…われわれが自分の考えをまとめて有効に表現するという訓練を日本語でも受けていない…」、「工学・技術関係の論文翻訳をしておられる電気通信協会の平野氏によると、同氏のもとに提出される和文論文の中でそのまま英訳できるのは5パーセントにも及ばず、その理由はそもそも和文の原文がまともに書かれていないことにあるそうです。」

この本は1977年、いまからちょうど30年前に書かれているのだが、どうも事態はいっこうに改善されていないと思われる。改善されていれば、私のごとき存在が、いまさら、「明快な日本語文章を書こうよ」なんて事を叫ぶ必要はさらさらないわけだ。

澤田先生の努力も一般的には実らなかったようだ。版だけは重ねて、私の手元のそれは55版を示しているから、多くの読者、つまりなんとかせにゃという「需要」は続いているのだろうけれど。

この本が、あるいはこの後もいくつか紹介していく類似の書き方教科書が大きな改善の波を起こせなかったのは実際にどう書けばよいのか、訓練の仕方が示されていないことにあるのではないかと、読みながら私は考えている。(篠原正泰 2007/01/18)

17. 文書作成に必要な「心・知・勇」

文書およびそれを構成する文章は、読む人にわかってもらおうという「心」が無ければ、結果としては難解なものになる。他者が読んで分からないのは、書き手である自分の責任であると思わず、読む人の能力の問題だと考えている人には、わかりやすい文書は作れない。

平明な文書はまず何よりも、他者に対する「優しい心」が無ければ生み出せない。この心を持たない人が書いた文書は、読んでいて極めて不愉快である。書き手の「心」と「態度」は文書に現れるのである。一読して意味がつかめない文書が横行している理由は、親切心が無い人、技量がない人、あるいは臆病な人が書いているから、ということになる。いわゆる「心・技・体」が整っていない。

世界の人々にものごとを伝えて正確に理解してもらうには、文書構成は論理的に展開され、文章記述は分かりやすく明快に書く必要がある。日本人は、『明快な表現』ということに対して、あまりにも無頓着で、その努力もしていないと思われる。必要なのは読み手に理解してもらおうという『心・知・勇』である。

わかりやすい文章とは、例えば

1. 文章はなるべく短くする。→長文は悪文
2. 文章に流れを持たせるようにする。→「くだい、しつこい」はゴミ溜めと同じ
3. どちらともとれる文章にしない。→「一義的」に解釈できるようにする
4. 動詞を意識し、主語を明確にする。→「何を、どこに何する」他……

18. 「オープン・ジャパニーズ」が必要

日本は、世界各地のパートナーの協力を得て、仲間を増やしながら事業を展開して行かねばならない時代を迎えている。それと同時に、世界に向けて日本列島を開放して、勉強や仕事をしたい人は誰でもいらっしやいと歓迎すべき時代になっている。その時、日本人しか理解できない日本語しかなかったら、世界に出て行くのも世界から人を迎え入れるのも、まったく非現実的なこととなろう。厚生省の世界、司法の世界、特許の世界、医者の世界、大学の世界、保険会社の世界、市役所の世界、ありとあらゆるところでいまだに使われている意味不明の日本語を何とかしなければ日本の将来は危うい。

【記録】:朝日新聞夕刊 2019/08/09 の記事

長崎は8月9日、米国による原爆投下から74年を迎えた。被爆者代表として「平和への誓い」を読み上げた山脇佳朗さん(85歳)のことが大きな記事で取り上げられていた。「つたなくても自分の英語で」世界の人々へ自分の思いを伝えるために独学で英語を学んだという記事内容である。私は自分の関心ごとである世界へ「物・事・考え」を伝える為の「平明日本語」と結びついて大きな感動を受けた。自分への励みにしたいと思う。

山脇さんは定年退職を機に英語を独学で学び始めた。被爆者の思いを一人でも多くに届けたい。そんな思いに突き動かされてきた。1995年始めて人前で体験を語った。5年ほどして、通訳を介して外国人にも語る機会が出来ると、もどかしさが募った。誤訳のほか、丁寧に通訳してもらうほど間が空き、話す時間が減り、聞いてくれる人との距離が離れた。じかに話したいと思うようになった(中略)。2010年、長崎市長と英国のマンチェスター市に行き、現地の中高生約130人向けに英語で話すと反応が違った。「つたない英語を涙を流しながら真剣に聞いてくれた。(記事引用)